博士学位申請論文 概要書

日中戦争期の華北日本占領区における宣伝と文学

早稲田大学大学院政治学研究科ジャーナリズムコース　曲揚

問題意識・研究目的

日中戦争勃発後、日本の軍・政府は宣伝戦の一環として、国策文学、戦争文学、従軍ペン部隊など、文学を積極的に利用し、その有用性を発揮させようとした。国内のみならず、日本軍が中国大陸部における勢力範囲を拡大していくと同時に、日本占領区においてもマス・メディアを通して日本は多様な宣伝を積極的に行った。国内の戦争動員と言論統制のために文学が重要な手段とされたのと同様に、日本は海外の支配地域においても文化統制、戦争動員の一環として各占領地域の新文学を積極的に確立させようとした。

なかでも華北は満州国と中国の主要地域を結び、文化、地理、政治、経済、軍事などあらゆる方面において重要な意義をもつ地域であるため、日本は満州の経験を踏まえながら華北の実情に応じ、宣伝政策の設定と宣伝体制の整備を行い、新たな文学綱領を設定し、文学者を統制しようとした。この動きについて、先行研究は主に満州国と中国大陸占領区を統括する汪精衛国民政府に注目し、占領区を一括して論じることが多かった。しかし、華北占領区は満州国のような独立した国ではなく、実質的に日本の支配を受けながらも名義上「中華民国」を保っているという特殊な状態であり、大陸占領区の中でも実質的な自治が行われたため、満州国と汪精衛国民政府を混同して語るのではなく、史料や当時の刊行物を整理し、実証的に研究する必要がある。

また、戦時下のプロパガンダに文学が用いられたにもかかわらず、プロパガンダ研究と文学研究は学術分野の分断によって別々に行われてきた。宣伝と文学には、感情に訴えるという共通項があるため、戦時下の精神動員及び文化創造の重要な道具として宣伝に利用された文学にあらためて焦点をあて、中国大陸で行われた日本の宣伝戦が一般的に失敗したと評価されてはいるが、どのように中国の人々の心情に訴えようとしたのか、またそれに対して中国の人々がどのように反応したのか、占領区に於ける宣伝戦の内実を、宣伝と文学を学際的に研究することによって明らかにできるであろう。

そこで、本論文は、日中戦争期の華北占領区における宣伝と文学を考察し、次の三点を明確にすることを目的とする。即ち、①日本とその協力政権による華北での宣伝工作の政策方針、組織形態、管理体制を明らかにすること、②日中戦争期の華北占領区で日本が発行した定期刊行物を対象に、日本とその協力政権による華北占領区での宣伝活動を解明すること、③当時日本の支配を受けていた新聞雑誌から代表例を選び出し、その文学関係記事の分析を通して、文学と宣伝の関係がどのような実態であったかを分析する。

研究方法・使用史料・論文構成・時期区分

本論文は主に資料に基づく実証的方法をとる。手順として、史料整理、新聞雑誌の言説分析、文学テクストの分析を基軸としながら、研究を深化させていく。

日本とその協力政権が華北で行った宣伝工作の政策方針、組織形態、管理体制について、

日本政府、日本軍の政策指令や調査資料、華北占領区の行政機関に関する記録や紀要、各種団体組織の機関誌、華北占領区の新聞雑誌、同盟通信社や日本電報通信社などの通信社の資料などを使用して整理した。

また、華北占領区における宣伝工作と文学活動の検証のために、本論文は北支那方面軍の中国語機関紙『庸報』と中国語による国策新聞『華北新報』という二つの新聞を中心に、天津市政府の機関誌『津津月刊』と『大天津』、文学雑誌『中国文芸』と『中国文学』という華北占領区で発行された中国語の雑誌、及び日本電報通信社が発行した中国大陸向けの中国語宣伝雑誌を補助資料として、分析と検証を行う。

本論文は七章の構成となる。序論は問題提起と先行研究の整理、研究目的と仮説などを示した。第一章では、先行研究に基づき華北占領区における宣伝と文学の概況と戦前の背景を整理した。第二章から第五章までは、時系列に華北占領区における宣伝政策、定期刊行物の宣伝内容、文学への指導と文学雑誌の対応を整理、検討した。第六章では、第二章から第五章までの分析を踏まえ、分析対象である新聞雑誌から文学テクストを抽出して分析を行った。第七章では仮説を検証するとともに本論文の結論の意義を論じた。

華北占領区における宣伝と文学は、日中戦争期の日本と日本軍の政策変化、占領区の統治体制と協力政権の動き、中国大陸部や太平洋における戦況の変化などと連動している。そのため、時期区分について、本論文は日本とその協力政権の統治体制、宣伝政策、新聞統合を総合的に考慮し、1937 年盧溝橋事件直後から 1940 年汪精衛国民政府が成立するまでの確立期、汪精衛国民政府の成立から太平洋戦争勃発までの思想戦期、太平洋戦争勃発から 1944 年 5 月までの「大東亜聖戦」期、1944 年 5 月華北占領区の新聞新体制の確立から終戦までの「文化戦」期という四つの時期区分にした。

各章の概要

序論では、先行研究の整理を踏まえ、日中戦争期の華北占領区における宣伝と文学を考察するため、宣伝体制、文学指導、文学創作と宣伝工作の効果をめぐる四つの仮説を示し、それらを検証するために、時系列による整理と文学テクストの分析を行う実証的研究方法を説明した。

第一章では、日中戦争前の華北における新聞出版の環境、新聞出版業と通信社網の発展状況、国民党政府時代の新聞管理体制、中国の近代化における文学・新聞・宣伝の関係性を整理し、戦前から戦中までの、華北の新聞管理体制、文学と宣伝の一体化における連続性を示した。

第二章では、1937 年盧溝橋事件直後から 1940 年汪精衛国民政府が成立するまで、華北占領区における宣伝工作と文学指導の状況を考察した。この時期の宣伝工作は宣伝体制の確立と「新文学」の模索を中心に実施され、日本軍が主体となる全面的指導の下、臨時政府情報処が情報宣伝指導を担当し、各地警察局や新聞事業管理所が新聞を管理した。また、同盟通信社北支総局が通信社の統括を行い、ラジオや映画などのメディアもそれぞれの専門協会で管理するという分野別の宣伝体制が確立された。

『庸報』によれば、この時期の文学への指導は、華北占領区の統治を安定させるため、文化思想の再建が図られ、共産主義や新文化運動に対抗する新文学の概念の模索も行われた。結局中国伝統文化と儒学を中核とする「東方新文学」に帰着した。それと対照的に、華北文

壇の機関誌『中国文芸』では、「文化救国」・文学の独立を確保しようとしていたが、実際に掲載された内容は、研究紹介類が圧倒的に多くなり、小説や詩歌などの文学創作はほぼ見られなかった。

第三章では、汪精衛国民政府の成立から太平洋戦争勃発まで、華北占領区で行われた思想戦をめぐる宣伝工作を整理した。宣伝体制が確立された華北占領区での宣伝工作は、思想戦の展開と中国側の自主性の発揮を中心に進められ、新民会と協力政権の情報部門が強化された。華北政務委員会から地方行政機関まで情報部門が設置され、中国側の要人が宣伝の陣頭に立ち、日本軍が内面指導に回った。当局は文学を「新たな文化建設」の必要手段と看做し、反日作品以外に対する制限をある程度緩めた。そのため、新人作家と文学青年が活躍し始め、娯楽的通俗小説が人気を得て、官能的描写を特徴とする「色情文学」も流行るようになった。『庸報』は 1940 年を「文芸復興」の年と指定し、東亜新秩序建設の重点として平和文学に力を入れたが、その文学綱領は具体性がなく、抽象的なスローガンに止まっていた。

第四章では、太平洋戦争勃発から 1944 年 5 月の華北新聞新体制の確立までの宣伝工作を検討した。太平洋戦争勃発後、日本軍は戦争を中国側の「自衛」と強調し、華北政務委員会が指導の主体として、各省市公署に宣伝処を設置した。また、華北政務委員会情報局と華北宣伝連盟の指導の下、情報・報道・宣伝工作が一体となり展開されるようになった。消極的な言論弾圧から積極的な言論誘導へと転換し、精神動員・文化動員も重視され、文学に対して、指導的・教化的役割を重視し、戦争動員への協力を要求するようになった。『庸報』ではこれに応じて文学欄以外の頁では、プロパガンダ小説の掲載が始まった。それに対して、『中国文芸』では「色情文学」や「郷土文学」論争の議論が目立ち、周作人などの有名作家が消極的な対応を見せた。

第五章では、1944 年 5 月、華北占領区における新聞新体制の確立から終戦までの宣伝工作を検討した。華北占領区内の全新聞を統合した国策新聞『華北新報』の創刊による新たな新聞新体制の下、華北における新聞と言論管理が一元化された。この時期の宣伝工作の特徴は、中国語新聞『華北新報』と日本語新聞『東亜新報』の一言語一紙に代表されるように、宣伝体制の徹底的な一元化統合である。文化宣伝による精神動員が宣伝工作の中心となり、それまでの情報・宣伝・報道の一元化体制に文化工作も加わり、華北政務委員会情報局による強化指導の下で華北全域の文化宣伝体制が統一された。日本とその協力政権は文化戦や文学報国を打ち出し、物質文明ではなく、東方精神などの精神文明をもって英米と対抗しようとし、文化や文学により人の感情に訴える宣伝に転換し、「文学報国」や国民文学などの国策文学を打ち出した。華北占領区の新進作家の態度には、戦争動員を推進する積極派と、純文学を維持する対抗派の分断が見られた一方、周作人を代表とする既成作家たちが宣伝の表舞台に立つようになった。

第六章では、本論文の分析対象となる新聞雑誌から、文学テクストを抽出し、日本文学作品の紹介と翻訳、純文学の創作、連載小説、プロパガンダ小説に分け、それぞれ華北占領区で行われた言論統制政策と文学の置かれた状況に基づき、その変化と特徴を検討した。宣伝の道具である新聞雑誌に掲載された文学作品には、当局の文学指導を忠実に反映したプロパガンダ小説と同時に、戦意高揚を図る新聞全体の雰囲気とは対照的な消極的かつ抑制的な純文学の創作、占領区読者に社会現実から掛け離れた一種の「桃源郷」を提供した娯楽的通俗小説が存在したことを明らかにし、華北占領区における宣伝と文学は、協力と抵抗の二

項対立では捉えきれない複雑な関係を呈したことを示した。

第七章では、分析結果を整理しながら、序論で提出した仮説を検証し、日中戦争期の華北占領区における宣伝工作の特徴をまとめ、占領区における宣伝、文学と政治の関係を考察した。

結論

本論文は結論として、以下の五点を提示した。

第一に、華北占領区における宣伝工作の特徴は次の三つにまとめられる。①戦局の進展とともに、宣伝体制は分野ごとに管理する体制から強力な一元化管理体制に変化した。②戦局に応じて宣伝工作を行う主体が、日本軍から中国側協力者へ、また日本軍へと戻されるという過程を辿った。③言論統制の方針は、消極的取締から積極的な言論誘導へと転換し、報道機関を利用して民心を獲得しようとした。

第二に、日本とその協力政権は占領区の文学者を統括し、占領区の統治と宣伝工作に貢献できる「新文学」を育成しようとしたが、その抽象的な文学政策は、占領区の文学者たちにとって政治と戦争から逃げる隙間になった。統制される側の現地中国人作家による、政治と距離を置こうとする努力が、強い言論、政治統制が行われる占領区で却って、文学の自由、文学の芸術性と文学自身の価値を確保した。

第三に、統治側は、文学を以て読者の眼を日中戦争から引き離し、その視線を対外的（排日）から対内的（占領区建設）へ、闘争・反抗意識から平和意識へと転換させようとした。しかし、華北占領区のプロパガンダ新聞の紙面上は、当局が描きたい安定繁栄の生活像と占領区の人々が直面している彷徨や苦悩に満ちた実生活、ニュース記事に見られる戦争の暴力と文学テクストにみられる抒情の優しさというような対極となる現象が共存していた。

第四に、華北占領区における宣伝工作には表向きの日中連携と実質的な日本支配が併存する二面的な性格を持っていた。このような二面的な宣伝工作の影響で、日本による文学利用は、文学テクストを通して占領区での民族文化・歴史を再構築し、実質的に日本に属する「中国」を建設しようとする矛盾をが必然的に内包され、文学テクストが持つ柔軟に解読される可能性によって図らずも、日本が目指す協力獲得よりは、むしろ占領区にいる中国人の国家や国民意識の覚醒を促した。

第五に、華北占領区における宣伝と文学をめぐって、感性は武器として利用された。宣伝工作の軸は、戦況の悪化とともに武力から経済そして精神という道筋をたどり、理性に訴える宣伝から感性を動かす精神論へと変化した。

本論文は従来の研究では無視されがちな宣伝工作の末端にいる無名の執筆者たちの存在を可視化し、被害者の悲惨さ、加害者の残酷さ、敗退者の軟弱さ、勝利者の英勇などの定型的な宣伝文を占領区と宗主国の具体的な表情に変換し、その葛藤を形象化した。その結果、華北占領区の宣伝工作に描かれた日本支配が前提となる東亜共栄という未来像は、対日協力者を含む中国人が求めた国家の独立と発展を果たす未来像との間に根本的な矛盾を生じさせ、中国人の心に届くことはなかったことを示した。